

平城京と人々の暮らし

1 / 1

旧石器

縄文

弥生

古墳

飛鳥

奈良

平安

鎌倉

室町

今日の問い

奈良時代の国は、平城京を中心に、人々をどのように治めたのだろう。

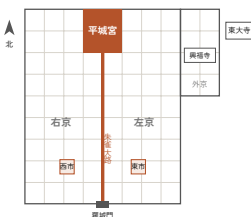
読み終えたら、最後の「問いへの答え」を見る前に、自分の言葉で答えてみよう。

1 新しい都・平城京

都のようす

へいじょうきょう
平城京

710年に奈良につくられた都。

わどうかいちん
和同開珎708年につくられた銅の貨幣。
都とその周りで使われた。

平城京のしくみ(模式図)

平城宮から見て右(西)が右京、
左(東)が左京。東大寺は都の東
の外。

710年、都が奈良の平城京に移された。平城京は唐の都・長安にならってつくられ、道路でごぼんの目のように区切られていた。北の中央には天皇の住まいや役所が集まる平城宮があり、南へ、はばの広い朱雀大路がのびていた。

東と西の市では地方の産物が売り買いされ、和同開珎などの貨幣も使われた。都のあとからは税の荷札(木簡)が多く見つかり、全国から品物が集められたことがわかる。平城京に都が置かれた時代を奈良時代という。

2 戸籍と口分田 — 人々の負担

人々の暮らし

はんでんしゅうじゅうのほう
班田收授法

戸籍にもとづいて口分田を与え、死ぬと国に返させるきまり。

くぶんでん
口分田

6歳以上の男女に与えられた田。女子は男子の3分の2。

さきもり
防人

九州北部の守りについた兵士。期間は3年。

国は6年ごとに戸籍をつくって人々を登録し、6歳以上の男女に口分田を与えた。口分田は死ぬと国に返すきまりで、これを班田收授法という。土地も人々も国のものとして治める考え方である。

人々は収穫した稲の一部を租として納め、成年の男子は特産物を納める調や、労役のかわりに布を納める庸も負担した。兵役もあり、九州北部の守りにつく防人になる者もいた。負担は重く、逃げ出す人もいた。

負担	内容
そ 租	稲(収穫の約3%)を納める
ちょう 調	地方の特産物(絹・塩・海産物など)を都へ運んで納める 成年男子
よう 庸	都での労役のかわりに、布を都へ運んで納める 成年男子

問いへの答え

奈良時代の国は、唐の長安にならった平城京を都とし、全国から税の品物を集めた。人々は6年ごとの戸籍に登録されて口分田を与えられ、そのかわりに租・調・庸などの税や兵役を負担した。土地も人々も国のものとして治めるしくみだったが、負担は重く、田を捨てて逃げ出す人もいた。

次は ノート で、下線に語句を書きながら確かめよう →

